研究論文

接触場面における在日ブラジル人の「聞き返し」とその回避方略

尾崎 明人（名古屋大学留学生センター）

生活の中で日本語を習得している在日ブラジル人8名の6回にわたるインタビュー（計48回）を資料として、日本語自然習得者が聴解問題を処理するために使用している「聞き返し」とその回避方略を分析した。その結果、①「聞き返し」表現の選択にはっきりした個人差がある。②日本語習得の初期には「ん？」「分からない」など「非確認型」（確認要求とは解釈できない「聞き返し」）の比率が相対的に高いが、レベルが高くなると「確認型」の比率が高くなる。③初期段階で多用される「分からない」という「聞き返し」表現はやがて回避されるようになる。④「聞き返し」回避の方略を多用する者がいる。などの点が明らかになった。本研究は調査のためのインタビューを資料としているが、実際面面の会話を資料として言語少数派が接触場面で感じる意的、社会心理的な問題を解明する研究が必要であることを指摘した。

キーワード：在日ブラジル人、自然習得者、「聞き返し」、「聞き返し」回避

Use and avoidance of clarification requests by Brazilians in Japanese contact situations

Akito Ozaki (Education Center for International Students, Nagoya University)

This paper attempts to analyze requests for clarification (RC) and RC avoidance strategies used by eight Brazilians living in Japan. Six interviews were individually conducted to the Brazilians over a period of 10 months (total of 48 interviews). Major findings are: ① there is an obvious variation among the informants' use of RC strategies and expressions, ② as competence in Japanese increases, relative frequency of confirmation requests becomes higher, ③ wakaranai “I don’t understand”, a frequently used RC expression at an early stage, is avoided at a later stage, ④ analysis of discourse clearly shows that some Brazilians employ RC avoidance strategies extensively. It is pointed out that natural discourse, not interview discourse for research purposes, should be analyzed in order to understand the emotional and socio-psychological problems linguistic minorities face in Japanese contact situations.

Key words: Brazilians in Japan, natural acquirer, request for clarification, avoidance of request for clarification

0. はじめに

1990年代に入り日本語を第2言語とする外国籍住民が日本国内で急増し、最近では定住化傾向が顕著になってきている。これに伴い日本語を第1言語とする者（L1話者）と第2言語とする者（L2話者）が直接交流を交わす接触面が増えている。しかしながら、これまでの接触面の研究は体系的な日本語教育を受けている日本語習得者の発話を資料とするものがほとんどであり、職場や日常生活の中でも日本語を使う傾向が見られる。この中で自国語も学んでいる自然習得者の接触会話を分析した研究は少ない。日本語の自然習得過程を解明しようとする研究もまだほとんどと言ってよい。

そこで、本稿では日本語教育を受けたことがない在日ブラジル人8名に対して行った6回の継続的な
インタビューを資料とし、8人の「聞き返し」とその回避に焦点を当て接触面のコミュニケーションについて考察する。

1. 研究課題
本稿では次の2つの課題について考察する。（1）ブラジル人L2話者の「聞き返し」は時間の経過とともにどのように変化するか。（2）どのような「聞き返し」回避の方略が用いられているか。

2. 分析の資料
本稿で分析対象とする発話資料は、筆者を含む4名の調査者が1年間にわたり継続的に収集したものである（詳細は坂口他（1998）を参照）。以下に資料収集の概要を示す。

（1）調査協力者：ブラジル人8名（男性6名、女性2名）
8名は全員がサンパウロ州出身のブラジルポルトガル語話者で、自動車関連の工場で働いている、体系的な日本語教育を受けたことがまったくな自然習得者である。

8名の日本語能力にはかなりの差が見られる。理解力、発話のなめらかさ、語彙の豊富さ、文構造の複雑さなどから総合的に判断すると、レベル1（会話の維持がきわめて困難）からレベル4（日常会話ほぼできる）まで大きく4つのレベルに分けられる。調査の年齢、滞在期間、家族構成などのプロフィールは巻末資料を参照されたいた。

（2）資料収集期間と収集回数：1995年7月から1996年8月の間に8名の協力者に対してそれぞれ2か月に1回、一人合計6回、延べ48回調査を行った。

（3）発話資料の種類：調査では毎回50分程度で発話調査、発音調査、文字調査を行った。本稿では発話調査の一部である15〜20分のインタビューを分析の対象とした。インタビューでは「うちはどこか」「いつ日本に来たか」「ブラジルでの仕事は何だったか」「ブラジルのいいところは何か」など18の質問を毎回繰り返し聞いている。

（4）面接調査者：48回の調査うち筆者は22回担当し、あとの26回は3名の日本人大学院生（男性1名、女性2名）が交替で担当した。4人の調査者はみな日本語教員または日本語教育経験者であり、外国との会話には慣れていた。この点で今回の資料は一般的の日本語母語話者がブラジル人にインタビューするのとは異質である。

（5）発話資料の文字化：一人の日本語母語話者がすべての資料を文字化し、さらに別の母語話者がポーズ、音調、相づかいなどに注意しながら文字化資料のチェックを行った。

3. 「聞き返し」と「聞き返し」回避

3.1 「聞き返し」とは
接触面での日本語の「聞き返し」を取り上げた研究はおそらくOzaki（1989）が最初であろう。尾崎（1992:252）は、「相手の話し声が聞き取れない、分からないという問題に直面し、それを解消するために相手の働きかける方策を「聞き返し」のストラテジーとよぶ」と定義している。「聞き返し」には「何」「分からない」などの明示的なものと、沈黙や笑い、フィラーを使った非明示的なものがある。また、「聞き返し」を回避して聞き流すという方略もある。

聴解問題発生

聞き返し
聞き流す（「聞き返し」回避）

明示的な「聞き返し」 非明示的な「聞き返し」
（聴解問題を表面化させる）（聴解問題を暗示する）

次の例1は典型的な「聞き返し」の発話交換を示したものである。

例1＞ETO 5回目（→は「聞き返し」発話）
1 J F1: 名古屋まで行くんですか
2 ETO: はい うん
3 J F1: へーよ行くんですか

—82—
3.2 「聞き返し」の認定
ある発話が「聞き返し」であるかどうかを判断することは必ずしも容易ではない。本研究では、(1) 前後の変調と音調などから判断してブラジル人が聴解困難に直面しているか否かを推定できる、(2) 「何？」のような音読み表現または「うん？」「ええ？」などの音声表現を伴っていること、(3) 日本人面接者が自己の発話をはかかれる調整を施していること、を基準として在日ブラジル人の「聞き返し」を認定した。ボーズや笑いなどの非明示的な「聞き返し」と「聞き返し」かどうか判断がむずかしい発話は今回の分析対象からは除外した。

3.3 「聞き返し」の分類
「聞き返し」はさまざまな観点から分類することが可能であるが23, 本稿では「聞き返し」の表現形式に着目して二つの分類基準を立てた。分類の第一基準は、「聞き返し」が先行する相手の発話の全体または一部を繰り返しているかどうかである。繰り返している「聞き返し」をエコ型、繰り返していない「聞き返し」を非エコ型と名づける。次の例2の「日本人？」はエコ型、「仕事？」は非エコ型の例である。
＜例2＞ETO回目
1 ＪF1: 日本人 たくさんありますか?
2 ＥTO: 日本人?
4）非認証型（非エコー・非認証型）：
例1の「はい？」

4. 結果と考察

4.1 在日ブラジル人の「聞き返し」

「聞き返し」の使用には、L2話者の日本語能力、L1話者の話し方、L1話者とL2話者の親疎・上下の関係、会話の目的と話題、両者の心理状態、騒音の有無などさまざまな要因が絡んでいる。このような要因を考慮せずに使用回数のみを数えても、限定的な結論しか得られないだろうが、本節では「聞き返し」の使用回数をもとに大まかな使用傾向を示すこととする。

（1）「聞き返し」の全体的な使用傾向

今回のインタビュー資料では在日ブラジル人の「聞き返し」が524例認められた。表1は8人の「聞き返し」を個人別、調査回数ごとにまとめたものである。

この表をレベル別に見ていくと、レベル1の3人、レベル2の2人は「聞き返し」が明らかに少ない。特にIKAは合計6回ときわめて少ない。この2人にあって今回の質問はそれほどむずかしいものではないかと考えられる。母語話者同士でも「聞き返し」が見られないのはあるから、すでに述べたように日本語能力が「聞き返し」を左右するわけではないが、レベル4のIKAとOSAの「聞き返し」が他の6人より少ない理由の一つはやはり2人の日本語能力の高さにあると言っていいだろう。

次に個人別に見ていくと、6回の調査を通じてTOYが6回、ETO、WAT、OSA、IKAの「聞き返し」はある程度減ってきているが、ADAとIUZの場合には12回目より6回目のほうが「聞き返し」が多くなっている。今回の面接調査では毎回同じ質問をしているので「聞き返し」は減っていくのではないか予想したが、平気で増加した減少傾向を見られなかった。このような結果になった原因の一つとして、調査期間が10ヶ月と短かったために聴解力がどれほど伸びなかったかと考えられる。

（2）「聞き返し」のタイプ別使用状況

表2は8名が使用した延べ524の「聞き返し」を個人別、タイプ別にまとめたものである。この表から次の点を指摘することができる。

①タイプ別に見ると、単純エコー型（33.6％）と非確認型（48.7％）が主要な「聞き返し」であることがある。

②非確認型はレベル1の3人が多用しているが、レベルが高くなるにつれて減る。逆に、確認型は増える傾向が見られる。この結果は先行研究の報告とも一致する。「うん？」「分からない」などの非確認型の「聞き返し」は相手の発話をまったく理解できなくても使用の対象である。非エコーの確認型を使うにはある程度の理解が必要とされるので、非確認型は日本語習得の初期段階に特に現れる。

表1　調査ごとの個人別「聞き返し」使用回数

<table>
<thead>
<tr>
<th>調査協力者</th>
<th>ADA</th>
<th>TOY</th>
<th>ETO</th>
<th>BEL</th>
<th>WAT</th>
<th>IUZ</th>
<th>OSA</th>
<th>IKA</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>日本語レベル</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>8</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>調査回数1回目</td>
<td>16</td>
<td>21</td>
<td>20</td>
<td>12</td>
<td>12</td>
<td>8</td>
<td>12</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>調査回数2回目</td>
<td>20</td>
<td>30</td>
<td>20</td>
<td>13</td>
<td>17</td>
<td>13</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>調査回数3回目</td>
<td>19</td>
<td>15</td>
<td>19</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>10</td>
<td>4</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>調査回数4回目</td>
<td>9</td>
<td>14</td>
<td>13</td>
<td>7</td>
<td>17</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>調査回数5回目</td>
<td>5</td>
<td>19</td>
<td>14</td>
<td>11</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>0</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>調査回数6回目</td>
<td>17</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
<td>4</td>
<td>10</td>
<td>6</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>86</td>
<td>105</td>
<td>96</td>
<td>77</td>
<td>58</td>
<td>61</td>
<td>35</td>
<td>6</td>
</tr>
</tbody>
</table>
表2 タイプ別「聞き返し」の使用状況

<table>
<thead>
<tr>
<th>調査協力者</th>
<th>日本語</th>
<th>エコー型</th>
<th>非エコー型</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>回数</td>
<td>比率</td>
<td>回数</td>
</tr>
<tr>
<td>ADA</td>
<td>1</td>
<td>27</td>
<td>31.4%</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>TOY</td>
<td>1</td>
<td>28</td>
<td>32.7%</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>ETO</td>
<td>1</td>
<td>34</td>
<td>35.4%</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>BEL</td>
<td>2</td>
<td>32</td>
<td>41.6%</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>WAT</td>
<td>2</td>
<td>13</td>
<td>22.4%</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>IUZ</td>
<td>3</td>
<td>26</td>
<td>42.6%</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>OSA</td>
<td>4</td>
<td>13</td>
<td>37.1%</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>IKIA</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>50.0%</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>176</td>
<td>27</td>
<td>33.6%</td>
<td>27</td>
</tr>
</tbody>
</table>

4タイプの中でもっとも使用回数が多かった非確認型の使用状況をまとめたのが次の表3である。この表では非確認型の「聞き返し」を「（ん？）」「ああ」などの言語的なものと「分からない」「分からない」「何？」のような言語的なものに分けてまとめてある。

非確認型をまったく使っていなかったIKAを除き、7人が使った非確認型の「聞き返し」が255例あった。このうち音声的な「聞き返し」が4割を占め、中でもETO(77.8%)とWAT(72.2%)の比率がきわめて高い。

| 言語的「聞き返し」の中では「分からない（分からない）」が111回(43.5%)と圧倒的に多い。レベル1のADAは「分からない」しか使っていない。TOYも3回目の調査で「忘れた」を1回使った以外はすべて「分からない」を使っている。ADAとTOYは「分からない」の多用者である。

一方、ETOは5回目、6回目の調査では「分からない」がなくなり、代わりに「いいか？」を使うようになっている。BELは1回目調査では「分からない」だけを5回使っていたが、2回目の調査では「何」と「知らない」も使っている。WATは「分からない」をまったく使わず「何」しか使っていない。IUZもOSAも「分からない」が減る傾向にある。

非確認型の「聞き返し」表現についても使い方に大きな個人差のあることが分かった。さらに、自然習得の初期に「分からない」という「聞き返し」表現を覚える、しばらくはこの表現を頻繁に使うが、やがて習得のある段階から「分からない」という直接的な表現を避ける傾向があることも分かった。

「ゆっくりお願いします」「すみません」「もう一度」のような非確認型は日本語教育機関で学ぶ学習者がよく使うが、今回の調査では2例しかなかった。これらの表現は職場などで耳にすることがほとんど
### 表3 個人別・調査回数別「非確認型聞き返し」の使用回数

<table>
<thead>
<tr>
<th>協力者</th>
<th>AQA</th>
<th>ADA</th>
<th>TOY</th>
<th>ETO</th>
<th>BEL</th>
<th>WAT</th>
<th>IU2</th>
<th>OSA</th>
<th>総計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>回数</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>6</td>
<td>7</td>
<td>8</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>べん?</td>
<td>3</td>
<td>7</td>
<td>10</td>
<td>5</td>
<td>4</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>なれない</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
<td>13</td>
<td>5</td>
<td>4</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>5</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>発音的</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>言語的</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>言語的</td>
<td>10</td>
<td>11</td>
<td>13</td>
<td>5</td>
<td>4</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>5</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>言語的</td>
<td>8</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>総計</td>
<td>20</td>
<td>35</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>55</td>
</tr>
</tbody>
</table>

比率: 36.4% 63.6% 100.0%
尾崎：接触場面における在日ブラジル人の「聞き返し」とその回避方略

ないのであろう。自然習得者と日本語学習者ではインタラクションが異なるため初期段階で使用される「聞き返し」表現にも違いが出たと考えられる。

4.2 「聞き返し」の回避
前節では表3をもとにレベルが高くなると「分からない」という非確認型の「聞き返し」が減る傾向にあることを指摘し、L2話者はこの「聞き返し」表現を回避するようになるのではないかと述べた。この推論を検証するためさらに具体的な会話例を分析する。

<例3>A D A3回目
1. J M 1：えっと A D Aさんのおうちはどこですか？
2. A D A：あ～ブラジル。
3. J M 1：あ～日本。
4. A D A：に～ほん？
5. J M 1：にほんのうち。
6. A D A：うち # #。
7. J M 1：あ～日本（うん）うん～どこ # うち どこに住んでいます。
8. A D A：# わかん～xx。
9. J M 1：んーはい！
（#は長めのポーズ、xxは不明個所。（）内は聞き手の発話、」「と」で発話の重なりの始まりと終わりを示す。）

A D Aは「うち」という単語を知らない。しかし、ターン2で「あ～ブラジル」と答えている。質問を理解し信頼をもって答えているのではない。ターン3でJ M 1が「あ～と日本」と質問を補足しているが、A D Aには質問が理解できない。A D Aがターン4で「日本？」ターン5で「うち」というエコー型を出したので、J M 1はターン7で再度質問全体を言い換えている。だが、A D Aは理解できずターン8で「わかんxx」と言っている。

A D Aは言おうと思えばいつでも「分からない」と言えただけである。にもかかわらず、踏み返したり避けようとしているように見える。A D Aの3回目の調査には「分からない」が9回使われているが、「分からない」の前にはエコー型の「聞き返し」や「う～ん」という踏み返す音や長めのポーズが必ず現れている。質問に対して即座に「分からない」と応じたケースは一つもなかった。

「分からない」という表現を避けようとする者だけでなく、「聞き返し」そのものを回避しようとする者もいる。それがはっきりと現れているのはW ATの話である。次例4ではブラジルのいいところが話題になっている。すでにW ATは水上スキーができることをブラジルのいいところの一つにあげている。それに続いてJ F 2が質問を出したところである。

<例4>W AT1回目（⇒は「聞き返し」回避と推定される発話）
1. J F 2：ほかにいいところありませんか？
2. W AT：あ～
3. J F 2：ありませんブラジル？
4. W AT：うん わたし。
5. J F 2：うん あのう W ATさんがブラジル？ここここが高いですってありますか？
6. W AT：あります。
7. J F 2：ありますえーとスキーがあるでしょう？（うん）スキー～いですねブラジル ほかにないかありますか？
8. W AT：ちょっと 少しね
9. J F 2：少し。
10. W AT：うん
11. J F 2：たとえばなにがあります？食べ物とかブラジルの食べ物はいいですかとか なにかブラジルでいいことありますか？いいところ？スキーでしょう ほかにありますか？
12. W AT：# 少しね
13. J F 2：少し？
14. W AT：うん
15. J F 2：なに？
16. W AT：「あります。
17. J F 2：なに「あります たとえば なにがあるありますか？
方略1：聞き返すときには、確認型（エコーと非エコー）を用いる。
（少しは分かっている。聞き取れているという「ぶり」をする。）
方略2：聞き取れたことばを利用して応答する。
（例4 ターン6の「あります」など）
方略3：相手の質問が分からなくても、ぼかした応答を出して相手の反応を見る。

WATがインタビューの中で自分から面接者に質問したり、聞かれない个人的なことを自分から話している、面接者にポルタル語を教える場面もある。WATは聴解問題を避けるには自らが会話の主導権を取って話すことだと考えているのかもしれない。

本節では「聞き返し」回避の方略を分析し、「聞き返し」そのものを回避しようとする者、「分からない」という「聞き返し」表現を避けようとする者がいることを報告した。このことは自分の日本語能力不足を表出せずにたくないというL2話者の意識を反映するものではないかと考えられる。もしそのような意識があるとすれば、「聞き返し」のタイプと表現形式には心理的に使いやすいものと使用にくいものとがあり、使用に優先順位があるかもしれない。

「聞き返し」を避けたいという意識は、L2話者のおかれた社会的立場と無関係ではあるまい。職場などでは日本語能力の不足がL2話者に対する軽蔑や非難、叱責の原因になりえるし、場合によっては職を失うことにさえつながる。社会的に弱い立場にあるL2話者が日本語能力の不足を隠すために「聞き返し」回避の方略を使おうとするのは当然のことではなかろうか。

5. おわりに

本稿では8人のブラジル人自然習得者に対する延べ48回のインタビューを資料として、「聞き返し」とその回避方略について考察した。主な結果は次の通りである。
①「聞き返し」表現の選択にははっきりした個人差が見られる。
②日本語能力が高まるにつれて「聞き返し」は減る。
尾崎：接触場面における在日ブラジル人の「聞き返し」とその回避方略

③日本語習得の初期には「ん？」「分からない」などの非確認型が多用されるが、日本語習得が進むと、やがて「分からない」は回避されるようになる。
④自然習得者と日本語学習者の「聞き返し」には違いがある。
⑤「聞き返し」回避の方略を多用する者には、中間言語研究の分野では、「聞き返し」と日本語レベルとの関係、「聞き返し」をきっかけとする意味交渉の過程などに関心が寄せられてきた。しかし、「聞き返し」とその回避を、接触場面参加者の情意的、社会的側面から分析、考察した研究を筆者は知らない。Vasseur et al. (1996: 90-101) は「聞き返し」を会話参加者の面子（face）の観点から考察しているが、このような「聞き返し」回避の社会言語学的研究を行う必要がある。今後の課題は、調査のためのインタビュー資料ではなく実際の会話収集し、言語の欠落が接触場面で感じるコミュニケーション問題を広い観点から捉えていくことである。

注
3) Ozaki (1989) では「聞き返し」を①発話意図、②表現形式、③「聞き返し」の対象、という3つの観点から分類している。
4) 「分からない」は「答えが分からない」「答えるために日本の名言が分からない」という意味でも使われるが、本稿では前後の文脈から「聞き返し」と判断できる「分からない」だけを取り上げている。
5) 終助詞「ね」の使用状況を自然習得者と日本語学習者では大きく違っている (尾崎 1999).
6) TOY の2回目調査では、「分からない」が踏まなく4回連続して使われているケースがあり、この後すぐにインタビューは終了している。「分からない」は会話を終わらせる (拒否する) 手段になる場合があること示すものである。
7) WAT は調査1回目のインタビューで「少し」を24回使っている。「少し」は高頻度の単語である。

参考文献
青木直子他 1998 第二言語者と第一言語者とのやりとりにおける理解達成のプロセス 土岐哲他 (編) 就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究 pp.80-113。
藤井聖子 2000 在日日系ブラジル人と日本人との接触場面の分析一コミュニケーション・ストラテジー再考一国立国語研究所 (編) 日本語とポルトガル語 (2) ブラジル人と日本人との接触場面 pp.151-192。
ナカミズ・エレン 1998 ブラジル人就労者における日本語の動詞習得の実態- 自然習得から学習へ - 阪大日本語研究 15, 83-110。
ネウストプニー・J.V. 1995 新しい日本語教育のために 大修館書店大野陽子 2000 日本語学習者が使用する「聞き返し」のコミュニケーション・ストラテジー 初級後半から中級後半までのインタビューを基にー 南山日本語教育 7。
尾崎明人 1992 「聞き返し」のストラテジーと日本語教育 カッペンブッシュ他 (編) 日本研究と日本語教育 名古屋大学出版会 Pp.251-263。
—— 1993 接触場面の訂正ストラテジー 「聞き返し」の発話交渉をめぐってー日本語教育 81, 19-30。
—— 1999 就労ブラジル人の発話に見られる助詞の緩断的数論 (その1) ー終助詞「ね」を中心としてー 名古屋大学日本語・日本文化論集, 7, 91-107.
Ozaki, A. 1989 Requests for Clarification in Conversation between Japanese and Non-
日本の倫理学会 第4巻第1号


土岐哲他 1998 就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究（科学研究費助成金研究成果報告書、課題番号 06301099）


(2001年2月2日受付)
(2001年6月8日修正版受付)
(2001年6月26日掲載決定)

調査協力者のプロフィール

<table>
<thead>
<tr>
<th>略称</th>
<th>日本語</th>
<th>性別</th>
<th>年齢</th>
<th>同居家族</th>
<th>今回の</th>
<th>以前の</th>
<th>過疎滞在期間</th>
<th>推定学歴</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ADA</td>
<td>1</td>
<td>男25</td>
<td>2世</td>
<td>独身</td>
<td>94年11月</td>
<td>なし</td>
<td>10カ月</td>
<td>不明（高卒以上）</td>
</tr>
<tr>
<td>TOY</td>
<td>1</td>
<td>男24</td>
<td>2世</td>
<td>独身/調査中</td>
<td>94年12月</td>
<td>92年5月〜</td>
<td>34カ月</td>
<td>中卒</td>
</tr>
<tr>
<td>ETO</td>
<td>1</td>
<td>男25</td>
<td>3世</td>
<td>独身</td>
<td>94年11月</td>
<td>なし</td>
<td>10カ月</td>
<td>不明（高卒以上）</td>
</tr>
<tr>
<td>BEL</td>
<td>2</td>
<td>男36</td>
<td>非日系</td>
<td>既婚/妻と</td>
<td>94年9月</td>
<td>92年5月〜</td>
<td>25カ月</td>
<td>中卒</td>
</tr>
<tr>
<td>WAT</td>
<td>2</td>
<td>男29</td>
<td>2世</td>
<td>独身</td>
<td>94年7月</td>
<td>92年11月〜</td>
<td>20カ月</td>
<td>高卒</td>
</tr>
<tr>
<td>IUZ</td>
<td>3</td>
<td>女33</td>
<td>2世</td>
<td>既婚/夫と</td>
<td>94年9月</td>
<td>92年5月〜</td>
<td>25カ月</td>
<td>小卒</td>
</tr>
<tr>
<td>OSA</td>
<td>4</td>
<td>女32</td>
<td>非日系</td>
<td>既婚/夫と</td>
<td>93年2月</td>
<td>なし</td>
<td>29カ月</td>
<td>高校中退</td>
</tr>
<tr>
<td>IKA</td>
<td>4</td>
<td>男21</td>
<td>2世</td>
<td>独身</td>
<td>93年5月</td>
<td>なし</td>
<td>26カ月</td>
<td>中卒</td>
</tr>
</tbody>
</table>